



インドで見つけた「なんとかなる」の精神

市川 素さん 市川農園
Moto Ichikawa

世界遺産・富岡製糸場で知られる群馬県富岡市。

養蚕の灯が消えようとしている中、地域おこし協力隊として移住し、
独立して養蚕農家としての道を歩み始めたのが市川素さんだ。

大手造船会社を退職してJICA海外協力隊(JOCV)に参加した市川さん。なぜ今、富岡市で蚕と向き合うのか。その歩みを紐解くと、派遣先のインドで味わった挫折と、そこから見つけた自分らしい生き方への確信があった。

市川さんの現在地 消えゆく伝統を背負う

現在、市川さんは富岡市の丹生地区を拠点に、独立農家として生計を立てている。養蚕シーズンの5～10月は飼育に全力を注ぎ、冬場はクワ畑の管理や野菜栽培に従事する。

市川さんが養蚕に惹かれた理由は、直感的なものだった。「インドで繭を見たときに、すごく綺麗だと思ってますよね。蚕って何千年も前から人間と

一緒に生きていて、人はその糸を服にしてきた。その歴史や、神秘的な真っ白な繭の姿を見て、『面白いな』と感じたんです」

しかし、日本の養蚕業は今、まさに消滅の危機にある。富岡市でさえ、共に汗を流す農家の多くは70代から90代。市川さんは、日々リアルな危機感を肌で感じている。「終わらせたくない、と切に思います。おじいさんたちが、まだ軽トラがない時代に背中に担いでクワ



を取りに行っていたという話を聞くと、受け継がれてきたものが、すごく大事なものに思えて。途絶えたと、もう二度と復活することはない。それをなくしちゃいけないという気持ちがある、今の僕を突き動かしています」

地域おこし協力隊を経て、自ら家を購入し家族で定住。後継者がおらず耕作されていない畑を地域の農家から借り受け、養蚕農家として独立した。そんな話を聞くと「移住して成功した人」に見えてしまうが、その根底にあるのは、泥にまみれて地域の先輩たちに教を請う、養蚕技術への誠実な姿勢だった。

JOCV時代

期待に応えられないもどかしさ

市川さんと養蚕との関わりは、コミュ



とれたての小松菜を販売。この日は「知り合いに配る」と山崎さんがまとめて買い上げ



冬場は桑畑の剪定も大切な作業。企業が所有する畑や、他の農家からの依頼も受けている



不良品として廃棄する「玉繭」。2頭の蚕で作られる玉繭を「縁起物」として求める人も多いとか

ニティ開発の隊員として派遣された南インド、アンドラ・プラデシュ州での活動が起点だった。配属先の要請は、個々の養蚕農家を自助グループとして組織化し、生計を向上させること。しかし、現場で待っていたのは、市川さんの想像をはるかに超える期待の重さだった。

かつてその地には、日本の養蚕技術を伝えた専門家たちがいた。今も記憶に残る彼らの活躍の影で、やって来たのは技術を持たない若きボランティア。農家からは「日本の剪定バサミが欲しい」「金銭的な支援はないのか」と突きつけられるが、知識の乏しい自分には何も応えられない。もどかしさを募らせるなか、次第に人々が離れていく現実に直面し、深い無力感を味わうことになった。

そんな失意の底で、「失われていく日本の養蚕技術をインドに残すために、死に物狂いで取り組んだ」という、かつての日本人専門家の言葉が市川さんを勇気づけた。現地の人々が自分に期待を寄せるのは、先人たちの活動への感謝と敬意が今も息づいているからなのだ気づかされた。

インドでの2年間は、決して成功体験

ではなかったかもしれない。しかし、その時味わった「何も持たない自分」へのもどかしさと、インド人から学んだ「なんとかなる」という精神が、日本の伝統産業の担い手となるための、最大の原動力となったのである。

未来へのビジョン

「肩書き」よりも「技術」を

「インドに行って、価値観が180度変わった」——よくあるフレーズだが、市川さんの言葉には経験に裏付けられた重みがある。例えば、 Dengue 熱に倒れた時のこと。近所の住人が次々と押し寄せ、「パパイヤを食べれば治る」「ゆっくり休め」と延々と喋り続けていく。日本では非常識とされる振る舞いも、インドではそれが真つ当な優しさの形なのだ、身をもって知ることになった。

帰国後、市川さんは元の会社へ復職したが、机に向かうだけの日々には違和感を覚えて退職。インドに関わりたいと国際協力の道を選んだ。しかし、またしても壁にぶつかることになる。「本当に評価されるのは、組織の肩書きよりも、

市川 素さん プロフィール

京都生まれ、滋賀県育ち。岡山県の造船会社で3年間勤務し、退職してJOCVに参加。復職後、在外勤務経験を経て退職。JICAで2年間インドの事業に従事した。2022年に地域おこし協力隊として妻と娘と共に富岡市に移住。活動を終えて養蚕農家として独立した。

その人にしかできない技術やスキルだ」そう確信した時、ふと思い浮かんだのが、インドの農村で目にした「自らの手で繭を育てる農家」の姿だった。

効率や安さばかりが重視される世の中で、市川さんはあえて「手間のかかる道」を選んだ。「一見、非効率に見えるものの中に、実は守るべき価値がある。安きに流れてしまうのは『ちょっと待ってよ』と思うんです。そういう価値を、僕自身の生き方で証明していきたい」「自分には武器がない」と悩んでいる人にとって、市川さんの言葉は力強いエールになるはずだ。

市川さんへのエール!

富岡市経済産業課
課長補佐
山崎知恵子さん



富岡の未来を共に紡ぐ

養蚕の世界へ飛び込んでくれたことに感謝しかありません。「面白い」という市川さんの感覚は、養蚕の厳しさを知っている立場からすると、とても新鮮です。しかし、扱うのが難しい生き物としっかり向き合っている姿をみれば、中途半端な気持ちではないことがよく分かります。富岡のシルクを繋ぐ者同士、これからも頑張っていきたいです。